

# 第13回 人間・環境学フォーラム 新入生歓迎記念講演会

4月7日(木) 16:30~18:00 大学院棟地下大講義室

## 人類学のフィールドワークから読む宗教復興の現代的意味

やまだ たかこ

山田孝子教授 (大学院人間・環境学研究科) 16:35~17:15 司会：福井勝義教授

西チベットのラダッキにおいて、伝統医学とシャマニズムの実践についての調査を行って以来、北海道アイヌ、東シベリアのレナ川流域に住むサハ、西シベリアのオビ川流域に住むハンティ、インドのチベット難民において、とくに宗教、世界観に焦点をあてて、人類学のフィールドワークを行ってきた。

これらの民族の中で、ラダッキは、チベット仏教への帰依とシャマニズムの実践が生活のなかで生き続けてきた例である。また、チベット社会をみると、ダライ・ラマ法王への帰依が亡命社会の結束を維持する中核となるばかりでなく、僧院での修行を求めてチベットからインドへの旅を決行する者もいまだに後を絶たない状況にある。チベット仏教は信仰上の問題であるばかりではなく、彼らのアイデンティティの要ともなっている。

これに対し、アイヌ、サハ、ハンティは、文化復興の名の下に伝統的宗教が復興されてきた例といえる。たとえば、アイヌではアイヌ新法制定を目指す政治運動と連動し、文化復興が進められる中で、「新しいサケを迎える儀式」、「祖先供養」、「シシャモカムイノミ」、「イオマンテ」など、各地で伝統儀礼の復興が行われてきた。サハやハンティをみると、ソビエト体制の崩壊によりそれまで反宗教政策により禁じられていた伝統的宗教—アニミズムとシャマニズム—は文化復興の名のもとに文字どおり「復興」されてきた。ここではこれらの宗教復興の事例をもとに、その現代的意味について考えてみたい。

## わが国の年輪年代法最前線

みつたにたくみ

光谷拓実教授 (大学院人間・環境学研究科) 17:20~18:00 司会：阪上雅昭教授

奈良文化財研究所では、歴史学の年代研究に資するため考古学、建築史、美術史などに関連した木質古文化財の年輪年代法による年代測定をおこなっています。また、全国各地で発見される埋没樹幹の年代測定を実施し、自然災害の発生年を確定する研究もおこなっています。

現在、国宝唐招提寺金堂（奈良時代）の全面解体修理事業が進行中です。当研究室では、これを絶好の機会ととらえ、建築部材の徹底した年代測定を実施しました。建築史、美術史、考古学研究者からは金堂建築の創建年代や改修年代を知るための重要な年代情報が得られるもの、と大いに期待されました。

部材総数約2万点のなかから、年代測定の対象となる部材を約250点選び出し、年代測定をおこないました。このうち年代が判明した部材は、全体の約6割でした。このなかで、金堂の創建年代に直接結びつく年代が得られたものは、わずか3点の地垂木で、伐採年はいずれも781年とわかりました。

この結果から、唐招提寺金堂は鑑真和上の時代のものではなく、弟子の如宝の時代のものであることが確定しました。現在、われわれが目にする金堂は、奈良時代の終わり頃のものだったのです。

今、年輪年代法の登場によって、わが国の歴史学を取り巻く研究環境が様変わりしようとしています。



国宝 唐招提寺金堂